

研究報告

名寄市立大学／短期大学看護学科卒業生と在学生による看護教育の評価

長谷部佳子^{1)*}、村上正和¹⁾、廣橋容子¹⁾、森田静江²⁾
平野智美²⁾、岩城美幸²⁾、岩坂信子³⁾

¹⁾名寄市立大学保健福祉学部、²⁾名寄市立総合病院看護部、³⁾北海道文教大学人間科学部

キーワード：連携教育、学生間や教員とのネットワーク、国家試験対策、卒業研究

はじめに

名寄市立大学は、前身の名寄市立短期大学が1994年に看護学科を設置して以来、看護師・保健師として就業する卒業生を輩出してきた。開学してから20年が経過しているが、卒業生の動向調査¹⁾は2006年に一度行われているのみで、在学生に対する調査は行なわれていない。また、前回の調査は就業状況を主目的とした調査であり、卒業生や在学生が本学で学んだことをどのように評価しているのかについての調査ではなかった。このたび名寄市立総合病院看護部と共同で臨地実習指導の在り方に関して検討する過程で、実習にまつわる本学の教育内容についても在籍者から評価を得る必要があると考えられた。そこで卒業生と在学生を対象に悉皆調査を実施した結果のうち、本報では本学の教育に関する評価について報告する。

1. 研究方法

(1) 調査対象

調査対象者は、名寄市立短期大学看護学科卒業生(1～12期)597名と名寄市立大学保健福祉学部看護学科卒業生(1～5期)251名の計848名、および在学生202名の総計1,050名とした。

(2) 調査方法

1) 調査項目と体裁

調査票は無記名自記式とし、調査項目は本調査の目的に適うように独自に設定した。主な調査項目は、本学で教育を受けたことに対する評価(メリット、デメリット)、本学に期待することとし、在学生の場合は実習に対する満足度、実習で教員や臨床指導者などから具体的に教えて欲しい内容、本学に入学してみてイメージと違った点についても回答を求めることとした。回答の選択肢については、学生による臨地実習の評価や臨床指導者に望む支援について報じた調査^{2,4)}や、卒業生の就業状況について報告した調査^{5,10)}を参考にしながら、幅広く選択肢を設けるように工夫した。基本属性については、卒業生の場合は性、年齢、看護基礎教育歴、就業職種、取得済み免許や通算勤務年数を尋ねた。在学生の場合は、個人が特定されるのを避けるため性、年齢層での回答を促し、就業を希望する職種を尋ねた。

2) 調査票の配布と回収

調査票は卒業生に対しては郵送法で配布と回収を行った。在学生へは講義・演習の終了後に調査の趣旨を説明の上で調査票を配布し、回収箱を設置して調査当日中に回収を行った。調査は2014年12月に実施した。

(3) 倫理的配慮

本調査は名寄市立大学倫理委員会の承認(No. 14-050)を経て実施した。卒業生への調査票郵送に際しては、

* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail: yhasebe@nayoro.ac.jp

名寄市立大学同窓会へ調査の趣旨を説明し、同窓会から発送する方法を採った。在学生に対しては、本調査への協力は自由意志が尊重されること、調査票は個人が特定されないように作成しているため学業成績への影響はないことを口頭と書面で伝えたくて実施した。調査票の投函をもって協力の同意を得たとみなした。

(4) 分析方法

基本集計を行ったのち、データの性質に合わせて一元配置分散分析や χ^2 検定を行い、回答の傾向を探る目的で数量化Ⅱ・Ⅲ類による分析を試みた。統計ソフトはSAS9.3を使用した。

2. 調査結果

(1) 調査票の回収率

調査票の回収率については表1に示すとおりである。在学生は169名から回収し、卒業生は宛先や住所不明で返送されてきた325名を除く523名中170名(短期大学96名・大学74名)で、計339名から回収できた。その結果回収率は、在学生83.7%、卒業生32.5%、全体では46.8%となった。北海道外からの返送と確認できたものは18部であった。339部の調査票に重大な回答の記入漏れは見られず、有効回答率は100%であった。

表1 調査票の回収率

	在学生						卒業生			
	合計	小計	1年生	2年生	3年生	4年生	小計	短期大学	大学	
在籍数(人)	725*	202	51	52	47	52	在籍数(人)	848	597	251
回収数(人)	339	169	43	42	36	48	宛先不明(人)	325	296	29
回収率(%)	46.8	83.7	84.3	80.8	76.6	92.3	回収数(人)	170	96	74
							回収率(%)	20.0	16.1	29.5
							補整回収率**	32.5	31.9	33.3

*: 在学生小計+卒業生小計(在籍数-宛先不明者数), **: 回収数/(在籍数-宛先不明数)で算出した。

(2) 対象者の概要

1) 年齢・性別

対象者の年齢層と男女比は図1に示すとおりである。在学生169名の年齢の平均は20.6±1.3歳、卒業生170名の平均は30.2±5.6歳、全339名の平均は25.4±6.3歳(19-52歳)であった。女性の回答者が多いものの、男女別での平均年齢には有意差を認めなかった。

2) 卒業生の動向

卒業生が申告した現在の就業状況は、看護師としての就業が108名(63.9%)、助産師7名(4.1%)、保健師24名(14.2%)、養護教諭3名(1.8%)であり、休(退)職中は27名(16.0%)であった。勤務年数の平均は2015年1月の時点で6年11か月±4年8か月(0か月-17年9か月)であり、短大卒業生の平均10年2か月±3年6か月と大学卒業生の平均3年3か月±2年8か月では、勤務年数に有意差が認められた(F=211.63、p=0.0001)。就業施設名

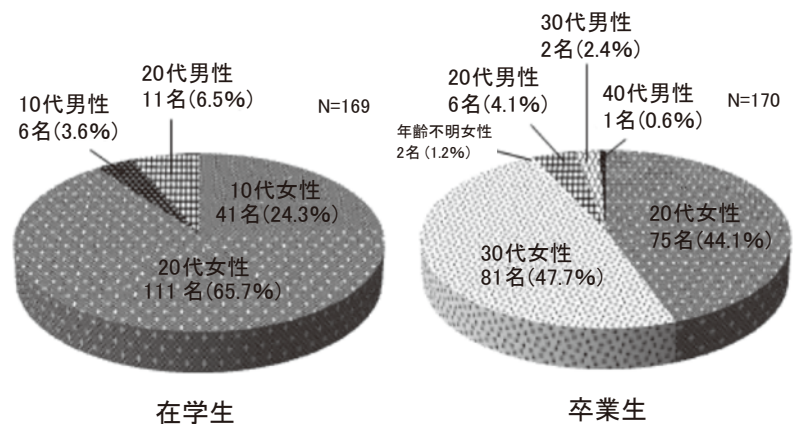


図1 対象者の年齢層と男女比

の記載があった107名について施設を分類すると表2のようになった。

卒業生が卒業後に新たに取得した資格については表3に示した。61名（卒業生の35.9%）が資格を取得しており、短大卒業生では保健師免許取得者や助産師免許取得者が多かったほか、それら資格の

取得過程として専門学校や大学、大学院へ進学していた。そのため、1名の卒業生が複数の資格を取得している場合が多かった。

就業施設については、最初の職場で働き続けている者は91名（53.5%）、別の職場で勤務していると回答した者は59名（34.7%）、無回答者が20名（11.8%）であった。職場を変更した理由は複数回答として表4に示しているが、結婚が最も多く、次いで出産・育児や回答者自身の病気や体力低下であった。職場の事情によるものでは、労働条件や勤務体制への不満、職場の人間関係などが挙がっていた。これらの回答内容を整理すると、個人的要因としては結婚や出産・育児を契機に引越・転勤が発生したこと、あるいは自身の病気や体力低下など、大きく2つが挙げられた。これらのライフイベントを転機に、職場の労働条件や勤務体制による責任過重感や、教育・研修制度などへの不満に関連したやり甲斐や充実感のなさ、人間関係の問題に対して見直しを図った結果、職場異動や進学・留学に至った様子であった。また、希望しない部署への配属は、責任過重感や、やり甲斐や充実感を感じなくなることに直結する様子がうかがえた。

表2 卒業生の勤務地と施設概要 N=107※記載があったもののみ

	北海道内	北海道外	不明
特定機能病院	6	1	
地域医療支援病院	12	5	
一般病院・診療所	48	5	1
市町村・保健所・市町村保健センター	19	1	
養護学校／小・中学校	3		1
看護大学・専門学校(教員)		3	
一般事務職			1
未就業			1

表3 卒業生の資格取得・進学状況 N=61※重複回答

	短期大学	大学
助産師免許取得	6	2
保健師免許取得	17	
小児救急看護認定看護師	1	
感染管理認定看護師	1	
国際認定ラゲーション・コンサルタント	1	
心臓リハビリテーション指導士	1	
排尿機能検査士	1	
認定運動支援薬剤師	1	
内視鏡技師	1	
養護教諭	6	4
衛生管理者	4	
社会福祉主事	1	
ケアマネージャー	9	1
介護福祉士		2
福祉住環境コーディネーター2級	1	1
ホームヘルパー1級		1
ホームヘルパー2級		2
医療事務	1	
専門学校進学	14	
専攻科進学		1
認定看護師教育課程進学	2	
大学進学	6	
大学院修士課程進学	3	2

表4 卒業生が職場を変更した理由 N=59 ※重複回答

分類	主な内容	人数
個人	結婚	23
	出産・育児	13
	自身の病気・体力低下	11
	転勤・引越	7
	進学・留学	7
	・保健師になるため ・養護教諭になるため ・スキルアップのため ・ハイリスク妊娠を学ぶため ・循環器看護について学ぶため	
職場	看護以外での自己実現	6
	家族の介護	1
	労働条件や勤務体制への不満	13
	職場の人間関係	10
	責任過重	9
	やり甲斐や充実感のなさ	7
	教育／研修への不満	4
	希望しない部署への配属	4
	他施設からの勧誘	4
	看護実践能力不足を自覚	3
	周囲からの低評価	1
	その他	5
・大学病院を受診しない患者に関わりたい ・より専門性を高めるため ・病院経営の移行に伴う退職 ・産科が閉鎖したことによる退職 ・上司からのハラスメント		

なお、卒業生が最初の就業先に勤務した年数の平均は4年7か月±4年(0か月-17年6か月)であり、短大卒業生の平均6年4か月±4年5か月(1か月-17年6か月)と大学卒業生の平均2年8か月±2年4か月(0か月-4年7か月)の比較では勤務年数に有意差が認められた(F=42.39、p=0.0001)。また、短大卒業の女性の方が大学卒業の女性よりも最初の就業先での勤務年数は有意に長かった(大学:女性2年8か月±2年4か月、男性2年9か月±2年7か月、短期大学:女性6年3か月±4年4か月、男性8年2か月±4年8か月、F=14.43、p=0.0001)。

(3) 在学生が就業を希望する職種および施設

4年生48名は就業予定施設が決まっており、看護師で就業すると回答した者30名(62.5%)、保健師と回答した者4名(8.3%)、進学予定者1名(2.1%)、無回答13名(27.1%)という結果であった。施設名の記載があった27名の内訳は、北海道内の地域医療支援病院11名、特定機能病院6名、一般病院・診療所3名、市町村・保健所・市町村保健センター4名、北海道外の地域医療支援病院1名、一般病院・診療所1名、および進学予定者1名であった。

1~3年生が就業を希望する職種の内訳は、3年生36名では看護師31名(86.1%)、助産師1名(2.8%)、保健師4名(11.1%)、2年生42名では看護師29名(69.0%)、保健師12名(28.6%)、養護教諭1名(2.4%)、1年生43名では看護師31名(72.1%)、助産師5名(11.6%)、保健師6名(14.0%)、医療職以外が1名(2.3%)であった。希望の職種は学年によって特徴がみられた($\chi^2=21.301$ 、 $p=0.046$)。なお、病院などから奨学金を貸与されている学生は4年生で8名、3年生で2名、2年生で9名、1年生で2名であった。

就業を希望する地域に関しては、3年生では具体的な施設名を挙げる者も多く、希望する理由のキーワードは“地元”や“教育体制がしっかりしている”であった。2年生は奨学金を地元の医療施設から受けていた。就業希望施設が決まっていない2年生でも、現時点では地元周辺の都市に戻って就職したいと回答していた。1年生においても地元に戻って就職したいという主旨は同じであるが、“地元が札幌であるため”と記述する者が多かった。

(4) 在学生の臨地実習に対する満足度

臨地実習に関しては、実習環境や臨床指導者・担当看護師と教員、および実習内容に対する満足度を尋ねた。主幹実習施設である名寄市立総合病院で実習する領域に限定して尋ねた結果であるため、老年看護学実習や公衆衛生看護学実習領域は含まれていない。表5に示すように、3年次後期から開始される成人看護学実習・小児看護学実習・母性看護学実習・精神看護学実習・在宅看護学実習については、いずれも77%以上と高い満足度を示した。成人看護学実習は男女で満足度が異なり、男子学生で「いいえ」と回答した割合が多かった(Fisherの正確検定法 0.042)。基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱについては学年によって満足度が異なっ

ており、1年生の基礎看護学実習Ⅰに対する満足度87.9%を除けば、領域別実習に比べると61.8~77.1%とやや低値であった。

表5 臨地実習の内容や環境に対して満足していますか ※各領域の上段の単位は%、中・下段は人

領域	1年生			2年生			3年生			4年生		
	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ
基礎Ⅰ	87.9	12.1	0	64.5	19.4	16.1	72.2	22.2	5.6	77.1	14.6	8.3
	29	4	0	20	6	5	26	8	2	37	7	4
	33人			31人			36人			48人		
基礎Ⅱ				70.4	22.2	7.4	61.8	29.4	8.8	62.5	16.7	20.8
				19	6	2	21	10	3	30	8	10
				27人			34人			48人		
成人							80.0	17.1	2.9	77.1	12.5	10.4
							28	6	1	37	6	5
							35人			48人		
4年生												
	小児			母性			精神			在宅		
	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ	はい	どちらとも*	いいえ
	79.2	14.6	6.3	89.6	8.3	2.1	85.4	4.2	10.4	85.4	6.3	8.3
	38	7	3	43	4	1	41	2	5	41	3	4
	48人			48人			48人			48人		

*:どちらとも言えない

(5) 在学生が臨地実習で教員や指導者に求めること

臨地実習で教員や臨床指導者から具体的に教えて欲しいと思うことについて、表6に示した17項目を設定して優先度の高いものから順位を付けるように促した。学年が上がり実習に慣れてくるにつれて困りごとの序列も変化しているのではないかと予想したため、これら17項目を説明変数にして、外的基準を学年にした数量化Ⅱ類による分析を試みた。表6の上段に示す項目は低学年が教えて欲しいと考える内容であり、下段になるほど上級生が希望する内容である。低学年では「効率的な事前学習方法」や「実習中の体調管理方法」など実習を行う上での基盤となるものに対するニーズが高く、高学年では「個別的な計画の立案能力」など実践力の強化に直結するニーズが高い傾向であった。

表6 臨地実習で教員や臨床指導者などから具体的に教えて欲しいと思うこと(数量化Ⅱ類の結果)

	N=169	学年							第1軸 重み係数		
		1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位			
効率的な事前学習方法		1・2年	8	2	6	4	4			-0.357	
		3・4年		1	1	1	2				
実習中の体調管理方法		1・2年	2	1		1	3			-0.094	
		3・4年				1					
ヒヤリ・ハットの回避方法		1・2年	5	1	1	2	3			-0.024	
		3・4年			1	2	2				
老若男女に対応するためのコミュニケーションスキル		1・2年	11	6	5	6	4			-0.007	
		3・4年	2	3	4	6	6				
空気や間の読み取り方		1・2年	2		3	3	1			0.047	
		3・4年		1		1	1	1			
対象者への教育指導力		1・2年	2	2	1		3			0.082	
		3・4年	2			2	3				
様々な観察項目に自ら気づける方法		1・2年	13	9	3	8	8			0.096	判別関数
		3・4年	19	13	16	5	2				係数
実習グループ内のトラブル調整能力		1・2年				1	2			0.102	1年生
		3・4年		1		2					-0.970
想定外の状況などへの臨機応変な行動力		1・2年	5	1	6	4	6		1	0.112	2年生
		3・4年	2	3	8	10	5				-0.203
看護技術習得のコツ		1・2年	4	9	8	6	6			0.159	3年生
		3・4年	12	9	7	3	11				0.631
臨床指導者や担当看護師への報告内容とタイミング		1・2年	5		2	4	7			0.172	4年生
		3・4年	6		3	2	8				0.574
看護技術実践力		1・2年	18	8	5	9	3			0.210	第1軸
		3・4年	11	15	8	12	6				(固有値
柔軟な思考力		1・2年	8	5	6	5	5			0.224	0.578)
		3・4年	6	5	8	14	6				のみ有意
対象者を観察した内容に学んだ知識をフル活用するアセスメント		1・2年	20	10	7	3	6			0.239	p=0.0015
		3・4年	20	14	10	5	12				
効率よく記録類をまとめるなどの書く能力		1・2年	8	5	5	5	2			0.355	
		3・4年	3	4	5	7	5				
個別的計画の立案能力		1・2年	7	7	8	4	2			0.369	
		3・4年	13	11	10	10	10				
敬語の使い方など社会常識全般		1・2年			1					0.570	
		3・4年		1			2				

(6) 名寄市立大学・短期大学看護学科で学んで良かったと思うこと

本学で学んで良かったと思うことを複数回答可として選ぶように促した。その結果、表7に示すように「他学科の学生と交流できて視野が広がった」と回答する割合は在学生、卒業生共に40%以上を占めていた。また、「尊敬する教員に巡り会えた」、「卒業後も同級・同窓生のネットワークが充実している」、「国家試験対策が充実していて有り難い」、「卒業してからも教員のサポートが得られる」、「卒業研究で調査や実験を実際に行えて問題解決能力を学べた」などの肯定率は、在学生か卒業生のいずれかで20%以上を占める状態であった。この集計結果を数量化Ⅲ類・Ⅱ類によってどのような内容が評価されているのかを探索したところ、Ⅲ類ではカリキュラム(実習・研究・連携科目)による人的交流、および図書館の充実や遊ぶ場所が少ないた

めに勉強に集中できるという学習環境に対する評価を意味する 1 軸に集約された。「遊ぶ場所が少ないために勉強に集中できた」は肯定的な評価を得ていた。また、数量化Ⅱ類で卒業生と在学生の特徴をみると、卒業生の方が卒業研究を高く評価していることがわかった。

その他の自由記述では、在学生在が「少人数制により人間関係が築きやすい」や「先生が身近にいる」、「教員に質問しやすい環境にある」と回答し、卒業生も「少人数教育による学生間の団結力や教員との親密さ」を記述し「大切な友人ができた」と回答していた。また、「街が小さく遊ぶところが少ない」、「親元を離れて学びに来ている学生が多かった」ことにより「皆で意欲を高めて学ぶことができた」、「名寄の自然と触れ合いながらのイベント開催や、ゼミでいろいろなところに行けて日々楽しみながら学業に励めた」、「看護専門学校よりは実習中の提出物等は少なかったのではないかと思います」、「講義中でも教員に気軽に質問しやすい環境」、「ゆったりした気持ちで学習できた」、「自分の時にはなかったが、地域と連携して活動をしているのが羨ましくかつ良いと思う」、「情報処理 (パソコン) の講義があつて役だった」、「興味のもてる科を発見することができた」、「保健師学校へ進学してみて短大の教員の面倒見の良さや熱心さに気付かされた。教員の人間性が魅力だと思った」などに加えて、短大時代の教員の人間性やその教えを尊敬する記述が複数みられた。

表7 名寄市立大学・短期大学看護学科で学んで良かったと思うこと N=339 ※複数回答

	総計	在校生(169)					卒業生(170)		
		計	1年	2年	3年	4年	計	短大	大学
看護ではない他学科の学生とも交流できたため視野が広がった ^C	42.6 144*	40.8 69	10.7 18	7.1 12	9.5 16	13.6 23	44.4 75	19.5 33	24.9 42
在学中に尊敬できる教員に巡り会うことができた ^A	37.3 126	26.6 45	4.1 7	5.3 9	8.9 15	8.3 14	47.9 81	24.3 41	23.7 40
卒業してからも同級・同窓生のネットワークが充実しているようだ ^{A, B, C}	28.4 96	21.3 36	1.8 3	2.4 4	4.7 8	12.4 21	35.5 60	10.1 17	25.4 43
実習では記録類が多かったが今では逆に良かったと思える ^B	24.9 84	22.5 38	4.7 8	2.4 4	5.3 9	10.1 17	27.2 46	15.4 26	11.8 20
国家試験対策が充実していて有り難い ^{B, C}	21.6 73	20.7 35	1.2 2	2.4 4	1.2 2	16.0 27	22.5 38	3.6 6	18.9 32
遊ぶ場所が少ないために勉強に集中できた	20.4 69	16.6 28	3.6 6	3.6 6	5.3 9	4.1 7	24.3 41	16.6 28	7.7 13
卒業してからも教員のサポートが得られそうだ ^{A, C}	18.6 63	13.6 23	1.8 3	3.0 5	1.8 3	7.1 12	23.7 40	6.5 11	17.2 29
看護倫理をきちんと学んで卒業することができた ^{A, B, C}	18.3 62	13.6 23	1.2 2	3.6 6	1.2 2	7.7 13	23.1 39	17.2 29	5.9 10
カリキュラムが過密ではなかったため考える時間を多く持てた	16.0 54	13.6 23	3.6 6	1.8 3	4.7 8	3.6 6	18.3 31	8.3 14	10.1 17
卒業研究で調査や実験を実際に行うことで問題解決能力を学べた ^{A, B}	14.2 48	5.9 10	0.6 1	0.6 1	0 0	4.7 8	22.5 38	7.7 13	14.8 25
実習期間が長かったが今ではその良さに気が付いた ^{B, C}	13.0 44	14.2 24	0 0	1.2 2	6.5 11	6.5 11	11.8 20	7.7 13	4.1 7
図書館の蔵書や開館時間帯などサービスが充実していた	12.1 41	8.9 15	3.6 6	3.0 5	1.2 2	1.2 2	15.4 26	7.1 12	8.3 14
泊まり込みの実習があったことで集団生活が身についた ^B	6.5 22	5.9 10	0 0	0.6 1	0 0	5.3 9	7.1 12	1.8 3	5.3 9
多重課題対処能力について意識づけをして卒業することができた	5.3 18	5.9 10	0.6 1	1.2 2	0.6 1	3.6 6	4.7 8	1.8 3	3.0 5
その他	8.0 27	1.2 2	0 0	0 0	0.6 1	0.6 1	14.8 25	8.9 15	5.9 10

* : 下段は人数、上段は%、A: 在校生vs卒業生で χ^2 検定による有意差有り($p<0.05$)、B: 学年間で χ^2 検定による有意差有り($p<0.05$)
C: 大学卒業生vs短大卒業生で χ^2 検定による有意差有り($p<0.05$)

(7) 在学生在が入学後に当初のイメージと違うと思ったこと

在学生的上記の質問に対する自由記述は表8に示した。大学の設備に関して大規模教育機関と同様のイメージを抱いていた学生や、公共施設に対する先入観として24時間オープンしているものと思込んでいた学生がみられた。施設に関する内容以外では、連携科目が思ったよりも少なかったという感想がみられた。連携科目に関する感想は保健師での就業希望者に多くみられた。看護学に関係する内容では、実習が学年に

よって週数も時期も違うことにより学業生活のリズムを取りにくいという意見や、受け持ち対象者が高齢者になりがちであることへの当惑、学習量の多さに困惑した記述がごく少数ながらみられた。

表8 在學生が入学後に当初のイメージと違うと思ったこと

N=79

		4年生	3年生	2年生	1年生	
設備	教室	教室が狭く“大学”というイメージとは異なった。高校の様でアットホームな感じ 閉館時間があると思わなかった 本館と新館が離れていて冬は寒い	3 2	2	1	
	実習室	設備が十分ではない(少ないベッド数や給湯システムによる練習時間制限など)		2	1	
	図書館	図書館が狭く小さく“大学”の立派なイメージとは異なった／閉館時間がある	5		2	
教員	教員が少ない／入れ替わりが激しい／連携が十分ではないときがあった	4	1	2		
カリキュラム	講義・演習	グループワークが多い 最新の技術や救助とかあまりない 演習時間が思っているより短く、教員の指導を受けられる時間が少ない			1 2	1
	連携科目	フィールドグループワークは楽しかった 他学科の先輩や後輩と多く交流することができてとても良かった 他学科と連携する教科がもっとあると思っていた／思っていた連携ではない	1 1			
	実習	実習時期が偏っている／4年生で多かったり9週間連続で辛かった／冬季実施 教員の人数が少なく掛け持ちのため、実習場に教員がいる時間が短い 教員や実習場所によって実習内容に偏りがある 実習が思っていたよりも辛くなかった。もう少し色々なことをしたかった 受け持ち患者が成人看護学実習などでも高齢者になりがちだった 実習施設までの交通機関が少なく、実習病院が遠い 大きな病院がないため、最新の医療を学んでいるとは思えない 2年次の実習終了後から3年次の実習まで空きが長いので意欲が持続されにくい 学内演習で使う物品と臨床で使う物品が異なっていた	2 1 1 1 1 1	1 1	2 2	1 1
スケジュール	忙しい時と余裕がある時の差が激しい。4年生は忙しく勉強時間がとれない事	3	1			
生活	経済	思っていた以上にお金がかかる(印刷可能枚数制限・実習施設への交通費等)	1		2	
	地域	名寄の土地のイメージが違った(不便／狭いコミュニティ／少ないネットワーク)	1		2	
	その他	大学生らしい生活が送れなかった 想像以上に勉強や実習が大変で忙しかった／思っていたより余裕がなかった 遊ぶ場所がないことで時間ができる 思っていたよりも学生間や教員との関わりが希薄な感じ 学生同士のつながりが強い 想像していたより楽しい日々を過ごせている	1 2 1		1 1	1

(8) 名寄市立大学・短期大学の看護学科に在学したことによるデメリット

本学に在学したことによる教育上のデメリットがある場合には自由記述をするように依頼したところ、「ない」「全くない」などと記述した短期大学卒業生は25名、大学卒業生は12名、学部生は4年生1名、3年生1名、1年生1名にのぼった。卒業生は良かったこととして、「少人数であるため学びが深かった」、「ここで学べてとても良かった」、「名寄が恋しくなった」、「一生の友人ができて卒業後も支え合っている」(2名)、などと書き込んでいた。

一方、少数ながらもデメリットとして挙げられたことは、卒業生から「大学名が認知されていないこと」(3名)に伴い大学名で採用する施設がある場合には不利になるかもしれないという懸念や、「看護記録類や実習期間が専門学校よりも少ないためか、アセスメント力や実践力不足を指摘されたことがある」(3名)、であった。また、在學生は近隣に看護大学や医学部がないため、「他大学の医療系学生との情報交換ができないこと、連携もないように感じる」ことと、「就職活動時の交通の不便さ」をデメリットとして捉えていた。

(9) 名寄市立大学の看護教育に望むこと

本学の看護教育に望むこととして回答を求めたところ、表9に示すような集計結果が得られた。コミュニケーション訓練を望む割合は、在學生、卒業生ともに33%以上と最も多かった。なお、在學生の志望職種別では看護師・助産師希望者がコミュニケーション訓練を多く希望しているという特徴が見られた(Fisherの正確検定法0.043)。実習室での技術訓練の強化に関しては、卒業生の方が在學生よりも希望する割合が高か

った (Fisher の正確検定法 0.031)。複数患者の受け持ちなどによる多重課題への対処訓練に関しても卒業生の方が在學生よりも希望する割合が高く ($\chi^2=10.22$, $p=0.001$)、在學生間では4年生の希望が多かった ($\chi^2=18.05$, $p=0.001$)。卒前の看護診断・看護過程の集中講義については、卒業生の方が多く開催した方が良いと答えていた (Fisher の正確検定法 0.012)。集中講義に関しては短期大学卒業生で希望する割合が高く、在學生では4年生が最も低い希望率を示した。卒業生では、医師の業務体験など連携教育のさらなる充実や、卒業生の支援窓口開設を希望する割合も高かったほか、ホームカミングデーの開催についても希望がみられた。在學生では、新卒1年目向け研修会の開催希望が多く、特に3年生、次いで4年生で希望者が多かった (Fisher の正確検定法 0.025)。また、在學生の方が卒業生よりも海外研修の企画を希望していた。なお、卒業後も図書館サービスの充実を求める割合は在學生でも卒業生でも20%以上を占めていた。在學生の中では4年生に割合が高率であり ($\chi^2=22.19$, $p=0.001$)、全体では4年生と大学卒業生で希望が多かった。

この集計結果を数量化Ⅲ類でさらに分析を試みたところ、大学としての対外的な催しと在學生向けの実践力強化を狙う企画を意味する1軸に総括された。在學生も卒業生も本学とさらにつながり続けられるようなイベント企画を望み、卒業生は再会の場を兼ねた企画を希望している印象を受けた。

表9 名寄市立大学の看護教育に求めるもの

	総計	在學生(169)					卒業生(170)		
		小計	1年	2年	3年	4年	小計	短大	大学
コミュニケーション力(対スタッフ&患者)を磨く訓練を増やして欲しい	34.9 118*	34.3	11.8	7.1	6.5	8.9	35.5	23.7	11.8
実習室での技術訓練をもっと増やして欲しい	25.7 87	21.9	6.6	4.1	5.3	5.9	29.6	16.6	13.0
卒業生の文献手配など図書館サービスを利用しやすくして欲しい ^B	24.6 83	22.5	2.4	3.0	4.1	13.0	26.6	10.1	16.6
連携教育で医師など他職種の業務を体験する実習を検討して欲しい	21.9 74	18.3	3.6	4.7	5.3	4.7	25.4	13.6	11.8
卒業前に看護診断や看護過程について集中講義をして欲しい ^A	21.0 71	15.4	3.0	6.5	3.6	2.4	26.6	21.3	5.3
卒業生の支援窓口(進路相談、研究指導など)を開設して欲しい	20.4 69	16.6	1.8	3.0	4.1	7.7	24.3	12.4	11.8
複数患者受持ちなど多重課題への対処訓練を増やして欲しい ^A	17.8 60	10.1	1.2	0	1.8	7.1	25.4	13.6	11.8
在學生・卒業生が参加できる看護の海外研修を企画して欲しい	16.9 57	18.9	4.7	4.7	4.7	4.7	14.8	7.1	7.7
新卒1か月~1年目の期間で研修会を何回か企画して欲しい ^B	13.9 47	11.2	0.6	1.8	4.7	4.1	16.6	8.3	8.3
卒業前にOSCE(オスキー)のような実技試験を行って欲しい	9.2 31	6.5	2.4	0	0.6	3.6	11.8	5.3	6.5
ホームカミングデーを企画して欲しい	5.0 17	4.7	0.6	1.2	1.2	1.8	5.3	3.6	1.8
教員の出前講義について広報活動をして欲しい	3.8 13	3.0	0	0	1.2	1.8	4.7	1.2	3.6

*: 下段は人数、上段は%、A: 在學生vs卒業生で有意差有り(p<0.05)、B: 学年間で有意差有り(p<0.05)

3. 考察

(1) 卒業生の動向

本調査票の回収率は在學生 83.7%、卒業生 32.5%、全体では 46.8%であった。前回の調査¹⁾の回収率 24.9%を上回っているものの、卒業生を対象にした先行調査⁵⁻¹⁰⁾の 34.9~70.0%に比較すると決して高い回収率とはいえない。しかし、医療従事者として精力的な活躍が期待されている 20~30 代の卒業生からの回答が得られたことは貴重であったと言える。また、今回の調査で明らかになったことは、回答者の勤務年数の平均が 6 年 8 か月と長いことである。最初の職場で働き続けている者は 53.7%と過半数に達していた。この最初の職場で就業している割合の高さは、開学後の 23 年目に調査を行った先行研究¹¹⁾の 48.7%よりも高率であ

り、注目に値すると考えられる。そして、結婚・出産などのライフイベントもしくは労働条件などへの不満で退職をした場合においても、地域医療支援病院や一般病院・診療所へ再就職して、ライフスタイルに合わせて働き続けている様子が見られた。

もう一つ重要な知見は、進学や新たな資格取得をしている卒業生（35.9%）が他の教育機関における調査^{5,10-11)}よりも極めて多いことである。そのため、前回の調査¹⁾に比較すると看護師での就業比率が減少して、保健師や助産師での就業比率が増加していた（初回調査では保健師 11.6%、助産師 3.1%）。山形大学医学部による卒業生調査での 24.8%⁸⁾を除けば、短期大学卒業生への調査である先行調査^{5-6,9-11)}ではいずれも 10% 以下と報告されている。したがって、本学卒業生で保健師就業者が多いことは、本学のカリキュラムや地域特性を含めた特徴と言えるのかもしれない。

（2）臨地実習に対する在学生の満足度

在学生の臨地実習に対する満足度は概ね良好な結果を得たのではないかと考える。2 年生の基礎看護学実習 I や 3 年生の基礎看護学実習 II に対する満足度が 60% 台と低かった理由としては、2 年生の場合は病院での実習が終了して、学内で最終提出に向けた記録をまとめている時期に調査を実施したことが大きいのではないかと考える。つまり提出する記録の充実度は実習の最終成績に影響する可能性があるため、学生は記録を完成させるためのストレスを感じていて、楽観的な評価はできなかったのではないかと推察した。また、3 年生の場合は、成人・老年看護学実習という基礎実習よりも長期間で受け持ち対象者との関わりも濃密な実習を終えたことで、基礎看護学実習 II に物足りないものなど気付きが出てきた可能性があり、相対的な評価として低くなったのではないかと推測した。今回の調査は実習内容を詳細に尋ねて評価したものではないが、全ての実習を終えている 4 年生が回顧的に評価している状況下でもある程度高い満足度を得ていることから、実習内容の大体に関しては現状維持でも問題はないのではないかと考えられた。

ただし、教員や臨地実習指導者から教えて欲しいことや、本学の看護教育に望むことに対する回答からは、卒業前の技術・コミュニケーション訓練や多重課題へ対処するための訓練、看護診断・看護過程の集中講義希望などが挙げられている。したがって、卒業前のイベントとして企画をするだけでなく、実習中の指導方法にも工夫を重ねることが望ましいであろう。

なお、入学前のイメージと異なったこととして、高齢者の受け持ちが多いことや実習時期の偏りが挙げられていたが、これらは本学に限らず高齢社会を反映した実状でもある。また、実習時期の偏りに関して是正を望む回答も少数みられたが、これについても本学だけの事情とは言い難く、看護教育カリキュラムの構造および臨地実習受け入れ施設の事情も絡んでくるため、すぐに改革ができるものではない。したがって、実習前オリエンテーションなどを通じてカリキュラムに対する理解を促していく必要があると考える。

（3）在校生が臨地実習で教員や指導者に求めること

臨地実習が有益ではあってもストレスフルな体験であることは事実である。看護計画立案や翌日に向けた行動計画の修正、および看護技術の手順チェックなど、実習中の学生には余裕がない。実習に際して教員や臨床指導者に教えて欲しいと望む内容は多いが、学年が上がるにつれてニーズの序列に変化が生じる様子が見られた。1～2 年生では実習に不慣れなために、事前学習方法や体調管理方法、老若男女に対応するためのコミュニケーションスキルに対する渴望感があり、空気や間の読み取り方も体得したいと願うようである。2 年生以降は基礎実習 II を経験して看護計画の立案などレベルアップした課題に取り組む必要があるために、看護計画や記録を書く能力の向上を願うが、さらに上級生になると社会常識を含む社会人としての行動の在り方として、報告のタイミングやアセスメントなどの思考力、実践力を高めたいと望んでいるものと推察された。なお、看護大学生を対象にした調査⁴⁾からも、成人看護学実習の達成感に関連する要因には事前学習で得た知識が十分であったという自覚と、その知識を十分活用できたかどうかの達成感に影響していたと報告されている。

したがって、臨地実習指導に際しては、学生が臨床指導者に報告を行う際の心理に配慮する必要があることがわかったほか、教員は効率的な事前学習ができるように具体的な指示を与える必要があること、および計画立案に関しても学生が自らの考えを文章化できるように具体的な助言を意識する必要があるとわかった。また、学生は多岐にわたる観察項目を指摘されるゆえに自ら気づけるようになりたいと願っていると解釈できたため、そうした学生の向上心を教員や臨床指導者が認めて励ます言動もこれまで以上に心掛けると、学生は意欲的に取り組めるのではないかと考える。

(4) 名寄市立大学・短期大学看護学科で学んで良かったと思うこと

本学で学んで良かったと回答する割合は、様々な結果を総合すると高いと判断できるのではないかと考える。もちろん、調査票の回収率は卒業生が 32.5%であり、本学に対して好意的な回答をしたい卒業生だけが調査票を返送してきた可能性は否めない。しかし、「尊敬する教員に巡り会えた」、「卒業してからも教員のサポートが得られる」、「卒業後も同級・同窓生のネットワークが充実している」、「教員への質問のしやすさ、親密さ」などの回答は、教員一同としては大変喜ばしい評価である。また、在生も卒業生も本学在籍中に形成されるネットワークの充実に加えて、遊ぶ場所の少ない名寄を学習に専念しやすい環境として受容しており、栄養学科や社会福祉学科、児童学科との交流や国家試験対策の充実、1人1テーマの卒業研究など、本学の長所を理解すると同時にその恩恵を感じていることがわかった。実際、国家試験対策として毎月の模試や学内に外部講師を招いての対策講座などに力を注いでいる大学は少ない。また、卒業研究についても、最近では複数の学生で1研究テーマとする大学や、研究計画書を作成するだけで終了する看護大学が増加している。本学でも、短期大学時代にグループでの研究を実施した時期もあった。しかし、病院勤務の場合は一般的に、看護師3年目から実務と並行して研究活動も行うことになり、大学・短大卒業生はリーダーシップを期待されることが多い。この傾向は先行調査^{7,14)}からもうかがえるほか、看護研究に関する相談や指導窓口の開設を母校に求めていたとの調査結果^{8,12)}もみられる。このような状況を踏まえると、本学の卒業研究は実用的であると評価されたのではないかと推察された。

(5) 名寄市立看護大学の看護教育に望むこと、および本学で学ぶことでのデメリットへの対応

本学の看護教育に望むことや本学で学ぶことへのデメリットに関する対応については、調査結果を総合して下記の項目にまとめたうえで記述することとしたい。

1) 図書館サービスの充実

図書館サービスの充実、現状への満足度が高い一方で、文献の取り寄せなどの図書館サービスの充実と継続を挙げる回答が多かった。このような回答の傾向は先行調査¹²⁾でもみられているため、学生にとって“大学の図書館”への思い入れは大きいと認識しなければならない。しかし、実際のところ本学では、卒業生の文献取り寄せや図書館利用に関しては全く制約が付いておらず、むしろ利用を歓迎している状況である。在生や卒業生の在籍時の満足度が高かったことによる思い込みの部分も大きいことが考えられるため、ホームページや既出のネットワークを介してアナウンスを行っていけば良いのではないかと考える。

2) 卒業前の技術・コミュニケーション訓練、集中講義など

先行調査²⁰⁾では、新卒看護師の多くが基礎教育で学んだ看護技術を臨床で実施する際に、物品や方法の異なりなどから困難感と精神的動揺を抱いていると報告されているほか、コミュニケーション技術に関しても実習よりも難しさを実感していると報告されている。本学では4年生への卒業前技術訓練を昨年度から既に開催しているが、今後も継続していく必要がある。多くの教員が関わらないと実技にまつわる内容は企画運営が困難であるが、今後はコミュニケーションスキルアップに関するものや看護過程の集中講義など、できる限り学生の希望を汲んで検討していきたいと考える。

3) 連携教育の充実

連携教育に関しては、現在の教育内容を肯定的に評価する一方で科目数の増加や、医師や薬剤師・作業療法士などとの連携を希望する回答もみられた。また、本学に学ぶデメリットとして、近隣に看護大学や医学部がないことや、それにより他大学の医療系学生との情報交換ができないことを指摘した回答もみられた。連携教育科目への取り組みは本学の最大の特長とも言えるため、大学全体でさらなる改良に取り組むことが望まれるであろう。

4) 海外研修企画、ホームカミングデー・卒業生支援窓口の開設

海外研修の企画については、特に在学生からの希望割合が高かった。海外研修は企画次第では看護大学との交流が可能であるため、前向きに検討していくと良いのではないだろうか。ホームカミングデーや卒業生支援窓口は、先行調査^{8,12)}でも卒業生のニーズが高いものである。本学においても公式サポートは重要であるため、既に形成されている非公式ネットワークの維持活用を図りながら大学全体で取り組む必要がある。

4. 結論

本学看護学科の在学生、卒業生を対象に臨地実習や教育への満足度について調査を行った。その結果、在学生と卒業生のいずれも本学の教育に対して肯定的であり、高い割合で学んだことに誇りを持っていることが明らかになった。少人数教育による学生間や教員とのネットワークの良さ、他学科とも交流ができること、図書館サービスや国家試験対策・卒業研究が実用的であることに加え、環境的にも勉学に打ち込める良さが評価されていた。調査結果から、本学の看護教育をより魅力的な内容にするための示唆も得ることができた。

謝 辞

今回の調査にご協力頂き貴重な意見を寄せて下さった卒業生および在学生の皆様から心から感謝申し上げます。皆様の益々のご活躍を祈念致します。

付 記

本研究は平成 26 年度名寄市立大学道北地域研究所の「課題研究」助成による調査の一部である。

引用文献

- 1) 舟根妃都美, 播本雅津子, 結城佳子, 畑瀬智恵美, 加藤千恵子, 鈴木敦子, 澁谷香代, 村上正和, 渡邊朋枝, 寺山和幸: 市立名寄短期大学看護学科卒業生の動向調査からの検討. 市立名寄短期大学紀要, 41: 11-23, 2008.
- 2) 平塚陽子, 中島春香, 永田暢子, 石津みゑ子: 新卒看護師が感じる看護基礎教育と看護実践現場とのギャップ. 北日本看護学会誌, 11(2): 13-21, 2009.
- 3) 阿部ケエ子, 丹澤洋子: 本学の看護技術教育を考える<第二報>—本学卒業生の看護技術教育に関する意見の分析から—, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, 14: 72-86, 2005.
- 4) 原田秀子: 臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討. 山口県立大学看護学部紀要, 8: 93-98, 2004.
- 5) 西浦郁絵, 中野智津子, 能川ケイ, 藤原智恵子, 丸山浩枝, 服部素子, 小西真千子, 井上由紀子: 神戸市看護大学短期大学部卒業生の動向(Ⅱ)—第1報 卒業生の現状—. 神戸市看護大学短期大学部紀要, 24: 91-99, 2005.
- 6) 遠藤恵子, 佐藤幸子, 青木実枝, 遠藤芳子, 後藤順子: 山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向(第1報)—卒業生の実態と看護技術演習に対する評価—. 山形保健医療研究, 7: 49-56, 2004.
- 7) 森口靖子, 横川絹恵, 松村恵子, 滝江七海子: 医療短期大学看護学科卒業生の医療施設への就業者の実態. 香川県立保健医療大学紀要, 4: 83-89, 2007.
- 8) 山形大学医学部看護学科厚生委員会: 看護系大学卒業生の職場定着及び専門性獲得に関する意識調査. 看護展望, 35(12): 1111-1117, 2010.

- 9) 中野智津子, 黒田公子, 吉田正子, 阿曾洋子, 松浦佳子: 本学卒業生の動向 (第1報) - 職場への適応状況と看護職への定着 - . 神戸市立看護短期大学紀要, 11: 101-116, 1992.
- 10) 伊藤美奈加, 大高恵美, 牟田能子, 三瓶まり, 佐々木理恵子: 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査 (第1報) - 卒業生の就業・進学状況と卒後の資格取得の実態 - . 日本赤十字秋田短期大学紀要, 11: 67-75, 2007.
- 11) 藤原智恵子, 中野智津子, 能川ケイ, 西浦郁絵, 丸山浩枝, 服部素子, 小西真千子, 井上由紀子: 神戸市看護大学短期大学部卒業生の動向 (II) - 第2報 看護職としての成長 - . 神戸市看護大学短期大学部紀要, 24: 101-118, 2005.
- 12) 青木実枝, 後藤順子, 佐藤幸子, 遠藤恵子, 遠藤芳子: 山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向 (第2報) - 就業上の困りごと、誇りに思うことを中心に - . 山形保健医療研究, 7: 57-66, 2004.
- 13) 大高恵美, 伊藤美奈加, 牟田能子, 三瓶まり, 佐々木理恵子: 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査 (第2報) - 社会人経験の有無と学業に対する取り組み、学生生活に対する満足度の関係 - . 日本赤十字秋田短期大学紀要, 11: 77-84, 2007.
- 14) 牟田能子, 伊藤美奈加, 大高恵美, 三瓶まり, 佐々木理恵子: 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査 (第3報) - 卒業生による在学中の教育評価 - . 日本赤十字秋田短期大学紀要, 11: 85-90, 2007.